

Hunt for  
Marriage

コンカツ!

桔梗 楓

*Kaede Kikyo*

### プロローグ

婚活とは、戦<sup>いくさ</sup>である。

古来より、女は優秀な遺伝子を巡り争<sup>あ</sup>ってきた。すなわち、その時代における「勝ち組の男」を奪<sup>う</sup>い合<sup>あ</sup>ってきたのだ。

そして今の世の中、女の幸せは男の稼<sup>かせ</sup>ぎによつて左右される。溢<sup>あふ</sup>れるほどの高級ブランド品、贅<sup>ぜい</sup>を尽くしたごちそう、目も眩<sup>くら</sup>むような豪邸。そんなセレブ生活を多くの女が求める。

優秀な男を勝ち取り、富と名声を手に入れたい。その衝動を本能と言わずして、何と云うのだ。つまり私は本能に従い、男を物色しているのである。人間として当たり前のことをしているのである。

そのどこが悪いのだろうか？

男だって、女を選<sup>え</sup>ぶじゃないか。男が理想の女を選<sup>え</sup>ぶのなら、女にもその権利があるはずだ。

人間、生きるためにはどうしても先立つものが必要だし、それは多に越<sup>こ</sup>したことがない。ケチなのは絶対嫌だ。金持ちなら私の欲<sup>ほ</sup>しがるものをポンと快く買<sup>か</sup>ってくれくらゐの心意気が欲しい

し、結婚すれば毎日顔を突き合わせるのだから、目の保養になる男のほうがいいに決まっている。仮にこれらの本能を欲望と呼ぶのなら、私は欲望に忠実な人間と言えるだろう。

私は本能に従い、欲望のおもむくままに優秀な遺伝子を探しているだけなのだ。高収入で共働きを希望しておらず、ケチじゃなくて顔がいい、優秀な遺伝子を持つ男を――

私、浪川琴莉は今日も今日とて仕事帰りに婚活パーティーへ参加する。

私が婚活と呼ばれる活動をはじめたのは三年前、大学を卒業した二十二歳の時。卒業後は契約社員として事務職に就いたものの、本当は働きたくなかなかつた。さっさといい男を捕まえて結婚し、専業主婦におさまって毎日オシャレを楽しみ、おいしいものを食べてぐうたら寝て過ごしたいと思っていた。

だが、人生はままならない。私は婚活を舐めていた。

まだ若い自分が誰かしら捕まえられようと思っていたのは序盤の頃。しかしすぐに、周りにいる肉食な獐猛女子の本気っぷりにドン引きした。

そう、もう一度言うが、婚活とは戦なのである。

女同士の無言の牽制。男を狙う目はライオンやヒヨウなどといった哺乳類ではなく、むしろ爬虫類に近い。じつとりと睨みをきかせたまま動かず、静かに目当ての男を狙い……そして、しなやかに撃つ。

さながらカメレオンが長い舌をジャッと出して虫を捕食する時みたいに、あつという間だ。少しでもないなと思つた男は、次の瞬間にはもう掻き攫われている。

そして、獐猛な女たちは、より優秀な遺伝子を得て勝ち組に……つまり、結婚していく。

情けない話だが、今のところ私は連敗記録を更新中である。

だが、諦めるわけにはいかない。

今働いている会社の雇用期間があと一ヶ月しかないのだ。しがない契約社員の営業事務として働く私には、リミットがある。去年は更新してくれたのに今年はしてもらえなかった。……もつと言うと、同僚であるもう一人の契約社員の女の子は更新されたのに、私はされなかったのだ。

その理由はわかりきっている。もう一人の子のほうがいいからだ。いつもニコニコしていて、正社員の男たちにも大人気だった。

中でも特に彼女を気に入っていたのは、ハゲハゲしい営業部の課長である。五十三歳・妻子持ちのくせして彼女にメロメロで、しかもえこひいきをする最悪上司だった。私には明らかに態度が冷たくて、彼女には手放しの笑顔。なんだあの課長、生まれ変わったら来世はゴキブリにでもなつて叩き潰されればいい。

そんなわけで、私には一刻の猶予も許されない。ゴキブリ転生予定の課長に「悪いけどうちも苦しくてね、来年の更新は難しいんだ」と言われた瞬間から私の運命は決まった。

今の会社の契約が終わるまでに、結婚を約束してくれそうな男を何とかして捕まえてやる。でな

いと、ハローワークに通つて仕事を探さねばならない。夢の専業主婦生活からこれ以上遠のいてしまふことだけは、絶対に避けたいのだ。

高収入で顔とスタイルがよく、お金に太つ腹な男を見つけてやる。

結局のところ、どこまでいっても欲望に忠実な私だが、あまりに妥協して結婚しても、訪れる未来は不幸なだけ。どうせ結婚するなら幸せになりたい。そして私が幸せになるには、隣に立つ男の見てくれがよく、金持ちじゃないと駄目なのだ。

今日参加している婚活パーティーは、平日の夜に行われる小規模なものだった。

昨今、婚活イベントは様々な男女のニーズに応じて多様化し、誰でも参加しやすくなっている。だが、今日のように小規模な婚活パーティーは、アタリの男が少ないのもまた事実。大概は必死で余裕がなく、好みの最低ラインさえ超えていたらとにかくアプローチしてくる男が多い。

好感を持てる相手ならこちらも喜んで連絡先を教えるけど、大体はハズレ……。ちよつといいなと思つた男は、相変わずいつの間にか狩られているのだ。まったく一秒たりとも油断できない。

婚活パーティーの内容には色々あるけれど、一番オーソドックスなのは軽食付きで、パーティーの前半は男が順番に女と話していくタイプ。

大抵、女は椅子に座つたままである。そこに男がやってきては軽く会話し、制限時間が来れば次の男がやってくる。まるで流れ作業のようなひとときは「回転寿司」と呼ばれているらしい。確か

にカウンターに座る女の前次々と寿司が流れてくるようにも見える。

ちなみに思つた通り、本日の寿司はイマイチだった。年取もイマイチ、顔もイマイチ、会話もイマイチ。

今日はやつぱりハズレだったのだろう……

げんなりする気持ちを抑え、薄いパーティションで区切られた漫画喫茶みたいな一画で、簡易椅子に座りながら次の男を待つ。全員と話して全滅だったら、今日はとつと帰ろう——そう思つた時、奇跡が起きた。

「はじめまして。よろしくお願ひします」

大トロだ。

いや、生ウニか。

とにかく、百円寿司の中に時価ネタの金皿が紛れ込んできた。

私は、目の前にやってきた彼をまじまじと眺める。

黒髪をさらりと後ろに流したオールバックで、細いフレームのメガネはシャープな輪郭にぴったりと似合っている。カタチのよい鼻に、薄めの唇。少しつり目だけどオーバル型のメガネがやんわりと冷たさを緩和しており、第一印象はとても優しそうに見えた。さらには高身長で、ダークグ

レーのスーツが大人の魅力を醸し出している。低い声も素敵で、挨拶の言葉すら耳に心地よい。

はつきり言って、超好みの美形男性だった。メガネが似合う美形なんて滅多にいない。私は慌てて立ち上がると、外面用の笑顔で男に挨拶をした。

「はじめましてっ！ よっ、よろしくお願います」

しっかりと頭を下げ、「私、とっても爽やかで明るい女の子なんです」オーラを出す。清楚ではきはきと明るく、爽やかな雰囲気の子が受ける。そのあたりの調査は完璧だ。

彼は穏やかにほほ笑み、こちらこそよろしく、と返事をしてくれる。

その笑みは本物なのか。私に一目惚れとかしてくれないだろうか。あと一ヶ月で契約を切られる私が、ようやくシンデレラになれる時が来たのだろうか。

時間は刻々と過ぎていく。回転寿司の会話時間はたった十分なのだ。私はサッと椅子に座ると自分のプロフィールカードを取り出し、向かい側に座った彼と交換した。

このプロフィールカードには、名前や学歴、職業、年収などが記載されている。

顔は抜群にいい。だけど、中身はどうだろう。この顔で年収が最低ラインだったら泣ける。それから学歴も見ないと。この顔で頭が悪かったらかなりつらい。

渡されたプロフィールカードに高速で目を通す。成海慧一、三十二歳。学歴は……うん、都内の有名Aランク大学。よし！ それから年収……

「ねっ、年収、にせんまん!？」

思わず声が出る。見間違いではないかと舐めるようにプロフィールカードを読み直したが、やはり間違いない。年収は二千万だった。

二千万。ということは、月にいくら稼いでるんだこの男。思わず指を折って計算してしまい、はああと感嘆のため息をつく。

職種はシステム開発、マネジメント。しかも自分で会社を立ち上げているらしく、役職は「代表取締役」。つまり、社長さん。いわゆる青年実業家ってやつか。

何でこんなすごい人が、少数数のしょぼい婚活パーティーなんかに参加しているのだろう。これは金皿どころではない。オール百円の回転寿司に、なぜか金塊が流れてきたような違和感を覚える。

私が「はあ」だの「ほお」だの言いながらプロフィールカードを凝視していると、向かい側でクスツと笑う声が聞こえた。ハツとして顔を上げると、彼は上品に手を唇に添え、くすくすと笑っている。

「面白い方ですね。私のカードを見て、そんなところと表情を変えた方ははじめてですよ」

「えっと、あの、すみません」

割と素でカードを読んでいたの、慌てて猫をかぶる。しおらしく謝ってみせれば、「いいえ」と彼は首を振った。

「あなたは頭の中で、必死に皮算用をしていたのでしようね。眺めていて飽きないほどに滑稽な表情でした。まったく愚かで浅ましい。あなたの顔を写真におさめようかと思いましたが、これが欲

の皮が張った人間の顔なのだ、名前をつけて保存したかったくらいです」

「——は？」

かちんと固まり、啞然とする。今、この男は何と言ったのだろう。ものすごくひどいことを爽やかな笑顔で言われた気がするのだが。

私の反応に、さらにくすくすと笑うメガネの男。

「その間の抜けた顔。面白いからやめてください。あまり声を上げて笑いたくないんですよ」

「なっ……な……」

何なのこいつ。

それが、美形メガネから受けた第二印象だった。

私たちの間に静寂が訪れる一方、薄いパーティションに仕切られた向こう側からは、別の男女の笑い声が聞こえてくる。

目の前の男は長い足をゆっくり組むと、呆然とする私に優しい瞳でほほ笑んだ。

「さて、質問があるなら受けつけますが。何かありますか？」

先ほどの暴言などなかったかのように、そんなふざけたことを言ってくる。

何だこいつ。もしかしてさっきの愚かだとか浅ましいといった言葉は、彼にとって暴言に当たらないのだろうか。だから普通に話を切り替えられるのか。

どうにも反応に困り、とりあえずもう一度彼のプロフィールカードに目を通す。

「あの……。じゃあ、この、年収二千万は本当なんですか？」

「嘘です」

「えっ!？」

「少し加減して書きましてね。本当は年収二千五百万なんです」

「にっ……、ご!？」

「というのも嘘で、正しくは二千と二千五百を行ったり来たり、ですね。出来高制のような仕事ですの」

あくまで穏やかな笑みを浮かべたまま言う男に、さすがの私も額にビキリと青筋が走る。

何だこのふざけた男。

「あの、私は真面目に話をしていますよ」

「ええ、だから私も正直にお答えしていますよ。年収の話ですよね？」

「そうですね……。あなたの答え方は私をからかって、馬鹿にしているようにしか聞こえません」

ムカツとしてつい喧嘩腰で話してしまう。たとえ年収二千万だろうが、意味もなく人をコケにしているはずがない。

彼は私の言葉に、ようやく表情を少し変えた。目を丸くし、「ほう」と感心したような声を上

げる。

「なるほど、鈍いわけではないのですね」

「ちよつと、本当に馬鹿にしてるわよね!？」

「馬鹿にしているつもりはありませんよ。思ったことをそのまま口にしていただけです」

飄々とした口調に、ぐつぐつと腸が煮えたぎってくる。これはどう考えても喧嘩を売られている。

この男、確かに顔がよくて年収も涎が出そうなほどすごくて、高学歴で文句なしの理想的な男と言うべきなんだけど、ただひとつだけ絶望的な欠点がある。それは、性格が極悪というところだ。

こいつはどう考えても性格が悪い。しかもそれを自覚しているタチの悪いタイプだ。

何でこんなのが婚活パーティーに入り込んでいるの？ もしかして、参加している人間を上から目線で馬鹿にするためにやってきたのだろうか。もしそうだとしたら最低な奴だ。

相手が高収入でも顔がよくても関係ない。私は憤然と腕を組み、向かいに座る男と同じようにフンツと足を組んでやった。

「あなた、ここに何しにきたのよ。婚活するために来たんじゃないの？」

こんなやつにへいこらと平伏するつもりはないし、媚を売るつもりもない。向こうが端から私を馬鹿にしているのなら、こつちだって礼儀正しくする必要なんか無い。思いっきりふんぞり返って彼と同じように上から目線で睨んでやると、男はクツクツと喉を鳴らし、ニヤリと悪人みたいな笑みを浮かべた。

「もちろん、そうだよ。今だって君と話をしているじゃないか」

敬語をやめ、くだけた口調で話しかけてくる。いよいよ遠慮がなくなったということだ。私は彼を睨みながら「どうだか」と吐き捨てた。

「そんな人をコケにしたしゃべり方で、まともな婚活ができるとは思えないけど」

「そんなことはない。それでも、人を選んで話しているよ」

「……私は、小馬鹿にしてもいいって判断されたわけ？」

「さっきも言ったが、馬鹿にしているわけじゃない。ただ、あまりに君が俺のカードを凝視して面白いくらい表情を変えてくれるものでね、ついからかいたくなってしまったんだ。今日、様々な女性とプロフィールカードを交換したが、皆一様に驚きながらも極力表情に出さないよう努力している姿が見て取れた。視線をうろうろとさまよわせたり、咳払いをしたりね。しかし君は……」

クツとたまらなくなつたように笑う。どうやら、先ほどの私を思い出したらしい。

「あんなにも思考が読みやすい表情は、はじめてだったよ。おまけに、質問を促してみれば開口一番に年収を確認してくる。会話のワンクッションもなくいきなりだ。そんな人もはじめてだったね。君はとても品がなくて金に汚く、そして欲望に忠実な人間だ」

ぐうの音も出ないほどの正論。そう、私は金に汚く欲望に忠実。品がないは言いすぎだと思うが、それこそ私の本質だ。

しっかりと自覚している。している、けど――

自分で言うのと、人に言われるのでは雲泥の差がある。それに、ここまでコケにされるほど罪深いこともしていないはず。そもそも、幸せな結婚を夢見てちよつとハードルの高い男を狙うことの、何が罪なのか。

「そういうあなたは他人を自分のものさしで測って一方的に批判して、一人悦に入るような人なんでしょうね。わかりました。よおくわかりました！ あなたの言う通りです、よかったですね。大当たりです。欲望の権化で申し訳ございませんでした。私はあなたの知らないどこかでドラ息子でも捕まえますから、どうぞさようなら。あなたが二度とこんな欲望の権化と出会わないことを祈っています」

私はフンツとそっぽを向いた。もうこんな奴と話をする気はない。まだ十分には早いですが、話は終わらせたばかりに男から視線を外す。

「さようならとはまた……欲望の権化と自分で言う割には、あつさりした性格をしているんだな。ここは婚活の場だろう？ もっと必死になって俺に媚びたり口説いてみたりしようとは思わないのか？」

「あなたが喧嘩売らなきゃ、媚びまくって尻尾振りまくってましたよ」

「それは残念だ。ぜひ見たかったよ。君のことは割と気に入ったのでね」

「心にもないことを。……え、気に、入った？」

キョトンとして、つい男に顔を向けてしまう。するとしてやったりと言うかのように男が笑みを

浮かべ、薄いレンズの奥で目を細めた。

「ああ、君のことは気に入っている。決して、興味の対象外ではない」

「そ、それは、結婚相手として気に入ってるって、こと？」

「フフ……。まあ、そう取ってもらっても構わないが。しかしとても残念なことがある」

彼はわざとらしく首を振り、憂いているかのように人差し指を軽く顎に添えた。いちいち仕草が演技じみて鼻につく。

男は私から受け取ったプロフィールカードに目を向け、フウとため息をついた。

「一応大学を卒業しているようだが、聞いたこともない私立大学だね。年収は期待していないが、なるほど、契約社員か。就職活動は失敗したのか、それともしなかったのか、どちらかな？ 特技は家事全般。あるもので料理をするのが得意、と。なかなか家庭的で好感が持てる回答だが、君にしてはやけに教科書通りとも思える。果たして本当かな？」

「うっ……。で、でも嘘をついてるわけじゃありません。掃除も洗濯も一応できるし、料理だってちゃんとできますよ。本格的なのは、まあ、難しいですけど」

「ふむ、つまり家事手伝いの域を出ないというわけだな。やはり思った通りだった。君は、俺の人生に必要な人間だ。そこが残念でならない」

「……はああ？」

思わず甲高い声を上げてしまう。何だ、人生に必要な人間って。もしかしたら私の人生にお



いて、最大の暴言を吐かれたかもしれない。

心の底から嫌悪した表情を浮かべているであろう私を意にも介さず、彼は目の前の簡易テーブルに、私のプロフィールカードをパサリと置いた。

「俺にメリットがひとつもないんだよ。君を妻に迎えて、得をする部分がひとつもない。そんな女性と結婚する意味がどこにある？ もし君が名家と言われる富豪の令嬢で、本当の身分を隠しているとすれば話は別だが？」

そんな風には見えないと言いかのように、男はニヤニヤと薄く笑う。私は男を再び睨んだ。いつそ鼻を明かす目的で嘘でもついてやろうか。ええ、実は私、すっごい名家のお嬢様なんです！ とか。しかしそんな嘘をついたところで根掘り葉掘り質問攻めにされ、ボロを出した挙げ句嘲笑されるのは目に見えている。

悔しい。なんだろうこいつ。本当に悔しい。

私がよほど憎々しい顔をしていたのだろう。性格最悪の美形メガネは、実に嬉しそうな笑みを浮かべる。

「君は本当に感情が顔に出やすいんだな。初対面の人間にここまで言われたのは、生まれてはじめてか？」

「……」

ダンマリでそっぽを向くと、「凶星か」と言ってくる。この男は、私を馬鹿にする以外の言葉が

口にできないのだろうか。そんな風に思っていると、ふいに簡易テーブルがぎしりと音を立てた。

視線を戻すと、彼は何か提案でもするかのように、テーブルの上で両手を組んでいる。

「歓談終了まであと一分もないが、どうだろう？ テストを受けてみる気はないかな」

「……テスト？」

「ああ、返事は一度しか聞かない。後でそれを覆すのもなしだ。今すぐに決めてくれ。テストを受けるか？ もし、テストで合格点が取れたら君を俺の妻にしてやろう。玉の輿、というやつだな」

ぼかんとして目を見開く。

この男は本当にわからない。何を考えているのか。何が目的で、私をどうしたいのか。そもそもテストって何だ？ 内容もわからないのに、今ここで決めなくちゃいけないのか。

頭の中で湧き水のように溢れてくる数々の疑問。だけど、歓談終了のリミットを告げるチャイムが聞こえた瞬間、私はほとんど脊髄反射のように――テストを受けると答えてしまった。

会社との契約期間が終了し、私の退職する日がやってきた。百パーセント社交辞令で劣いせうがいの言葉を口にする営業マンたちと、上辺うわべだけ悲しそうな表情をする同僚の契約社員に別れを告げる。

事務員私一人だけになっちゃう、寂しいよ、と半泣きで言う同僚。さらには、メールアドレスを書いた紙まで手渡された。もちろん、私から連絡する気などない。

アンタは晴れて契約更新されたんでしようが、と心の中で毒づく。アンタが選ばれ、私は切られた。

しかし、私はただの負け犬じゃない。いつか必ず、勝ち組になってみせる。アンタは、しょぼい会社で営業部のさえない男たちにかわいがられていたらいんだ。

私は心の底から呪詛じゆそを送り、会社を去った。

一週間後、私はショルダーバッグを肩にかけ、黒いキャリーケースを手に、住み慣れたアパートを出た。これから、婚活パーティーで出会った性悪しょうわるメガネこと成海慧一のもとへ向かうのだ。彼が提案した「テスト」を受けるために。

会社を退職して一週間以内に身の周りの整理をしろ、というのが彼から与えられた最初の命令だった。この場合、身辺みへんというのは人間関係のことではない。住んでいる部屋を整理しておけという意味だ。どうやら私は長期にわたり、別の場所に住み込みをしなければならぬらしい。

私は一人暮らしのアパートを掃除し、冷蔵庫をカラっぽにした。アパートの管理会社には長期不在の届けを出し、電気とガス、水道会社にも、連絡を入れてある。

彼に指定された待ち合わせ場所は、とある駅の改札前。複数の路線が乗り入れるその駅の一帯は、再開発も進む都内有数のビジネス街である。電車を乗り継ぎ、小一時間ほどかけて到着した。改札口を抜けると、高層ビルが目に入る。ポケットからスマートフォンを取り出して確認したら、約束の時間の十分前だった。うん、いい感じの時間だろう。

駅前の景色に目をやりながら待っていると、背後から「浪川さん」と声をかけられた。振り向いたそこには、件の男くだんではなくスーツ姿の女性が一人。

「失礼ですが、浪川琴莉さんですか？」

「あ、はい。……えっと、あなたは？」

「はじめまして。私は神部友紀かみべ ゆきと申します。成海から一通りの話は聞いておりますので、どうぞこちらへ」

「どうぞ……って。あのっ……」

神部と名乗った女性は、戸惑う私をよそに黒いローファアのかかとをカツカツと鳴らし、どこか

に向かつて歩いていく。慌ててキャリーケースを転がしながらついていくと、駅近くのコインパーキングにたどり着いた。どうやら車に乗って目的地に行くようだ。

彼女は白い軽自動車の後部座席のドアを開けてくれる。

「狭くてすみません。荷物はトランクに積みませね」

「あ、どうもありがとうございます」

私の荷物をトランクに積み、運転席に座る神部さん。私もおそるおそる後部座席に乗り込み、シートベルトを締めた。チャリとバックミラーをのぞくと、無表情で車を運転しはじめる彼女の顔が見えた。

黒髪をサイドで束ね、バレッタで留めている。控えめなお化粧に、特に目立った感じもしない、普通のビジネススーツ。そんな彼女からじみ出るのは、いかにも仕事ができる女のオーラ。

私の最も苦手なタイプだ。こういうタイプの女性と関わるとろくなことがない。特に何かしたわけでもないのに、彼女たちには毛嫌いされることが多いのだ。

男受けを意識しまくった栗色の内巻きボブカットに、つけまつげ。愛され女子を目指した甘く濃い化粧。私の外見はどうもお堅い女性にとって軽薄に映るようで、すこぶる受けが悪い。しかし私は、男性に受け入れられたいからこのスタイルを、貫き通している。

要するに、私は真面目な人間に嫌われやすいのだ。仕事のできないお荷物みたいな扱いをされ、いつも蔑んだ目で見られる。向こうがそういう態度を取ると私だってムカツとするし、気分もよく

ない。結果、両者の空気はぎすぎすと悪くなつて、あからさまに嫌味や皮肉を言われたりする。

この人もそういうタイプだったらどうしよう。

膝に乗せた手をぎゅつと握り、再びバックミラーを見る。神部さんは淡々とした表情を浮かべていて、感情は読み取れなかった。

彼女は成海慧一の名前を口にしたけど、どういう関係なんだろう。仕事上の上司と部下？ でも、そんな仕事だけのつきあいの人に、わざわざ私の迎えを頼んだりするのだろうか。もしかしたら、プライベートでも仲良くしている人なのかもしれない。たとえば、昔の恋人とか。

そうだとしたら私は嫌われコース一直線だ。なぜこんな、仕事よりも恋愛を取りそうな女が、などと思われていてもおかしくない。今まで真面目系の女の人には散々、恋愛脳だのお花畑だのと言われてきた。

でも実際、仕事と恋愛のどっちを取るかと聞かれたら、私は迷うことなく恋愛を取る。それは、真面目な女にも言えることではないだろうか。誰だつて結婚はしたいはず。そんなことはない、仕事が第一だ、と主張する人がいるのなら、存分に仕事と仲良くして仕事と結婚すればいいと思う。

そうだ。結局のところ神部さんが元カノだろうが今カノだろうが関係ない。私は札束と結婚するのだ。結婚さえできたら後はどうでもいい。

……それにしても、何であの男は「テストを受けるか」などと言ってきたのだろうか。あれほど人を馬鹿にしていたのに。私に恋愛感情を持ってテストを提案してきたとはどうしても思えない。人

をからかっているというか、おもちゃのように弄もてあそんでいるような気さえする。テストというのも、もしかしたら壮大なる遊びのひとつなのかもしれない。  
……だとしたら、一発くらいはビンタを食らわせたいところだ。

車の中は沈黙に包まれている。ずっしりとした重苦しい空気を感じつつ、世間話をする気にはなれず、ただ車窓から景色を眺ながめる。

車は駅からビジネス街に向かつてまっすぐ走る。高層ビルの並びに入ってからは何度か道を曲がり、やがてシックなマンションの地下駐車場に入っていた。神部さんは慣れた様子で車を停めると、静かにエンジンを切る。

「お待ちせしました。こちらのマンションの五階です」

「あ、はい」

ドアを開める音がやたらと響く、広い地下駐車場。正午という時間が原因なのか、停められている車は少ない。

都内ビジネス街のど真ん中に建つ高層マンションなんて、一体お家賃はいくらするのだろうか。つい所帯じみたことを考えてしまう。

地下ホールから建物のオートロックを解除し、神部さんはエレベーターに乗り込む。私も彼女の後に続いた。そして、ほどなく五階に到着する。

「先に言っておきますが、これからご案内する部屋は我が社のオフィスです」

神部さんは歩きながら、そう説明する。

「えっ、会社なんですか？」

「はい。月に数回開くミーティングや、資料庫としてこのマンションを使っているのです。成海が日本にいる間はここで寝泊まりをすることもありますが、彼の自宅は別にあります」

「はあ……」

私が曖昧あいまいにうなずいていると、彼女は五〇一号室のドアの前で足を止める。金色の縁取りがされた黒い玄関ドア。どうやらここが目的の部屋ようだ。

「成海はすでにおります。どうぞ」

ガチャリと、やけに重苦しい音を立てて、扉が開いた。

単身者向けの高級マンションといったところだろうか。玄関のすぐそばの左手に、ドアがひとつ。そして反対側には引き戸がある。洗面所やお風呂場かもしれない。

彼女は靴を脱ぐと私にスリッパを勧め、廊下をスタスタと歩いていく。キャリアケースを玄関に置き、私も続いた。

突き当たりのガラスドアはリビングに繋がっていた。

先に入った彼女の後ろから室内を見回すと、左側にはカウンターキッチン、そして質のよさそうなソファとローテーブルが見えた。右側は神部さんの言った通り、まさに資料庫のようになっ

いて、天井まで届くスチール製の本棚が三方に設置されている。正面の窓の一部は本棚に隠れてしまっていた。柵には本やらファイルやらがたくさん詰め込まれていて、フロアリングの床にも、段ボールやレターボックスがあちこち置かれている。

リビングの中にはドアがないので、間取りはLDKというやつだろう。

「成海さん、連れてきましたよ」

「ありがとう、神部。面倒をかけたな」

いえ、と短く返事する神部さん。

リビングには、私と神部さんと成海——だけではなく、他にも見知らぬ男が三人いた。全員、立ったままこちらを見つめている。

神部さんは戸惑う私から離れ、成海の脇に立つ。

成海は私を見据え、あの婚活パーティーで見せたのと同じ、不遜な笑みを浮かべた。

「久しぶりだな、琴莉。一ヶ月と一週間ぶりか」

いきなり名前を呼び捨てにされ、思わずムカツとして睨んでしまう。彼は相変わらず横柄で尊大だ。しかし今さらなのであえて抗議する気にもならず、私は短く「お久しぶりです」と返した。

今日、彼が着ているのは、上品なグレーのスーツ。

成海はストラックスのポケットに両手を突っ込み、こちらへ歩いてくる。そして目の前まで来ると、私の顎をクイと片手で持ち上げた。

「逃げずに来たのか。度胸だけは見上げたものだな？ そんなに俺の金が欲しいのか」

「……そうですよ。けどもし、あのテストの話が嘘だったと言うのなら、今すぐあなたの顔をぶっ殴って帰ります」

顎を掴まれたまま彼を睨みつけて言うと、途端に成海は噴き出し、くすくすと笑う。

「がめつさもここまでくれば本物だな。いいだろう、君をテストしてやる」

どこまでも偉そうな物言いをして、彼が手を引く。そしてスツと私の肩に腕を回すと、向かい側に立つ神部さんと三人の男性たちに顔を向けた。

「紹介しよう。彼女が俺の『妻候補』の浪川琴莉だ。これからしばらく彼女のひとりを観察し、俺と結婚するにふさわしい女かどうかを見極める。琴莉、この四人はうちの社員だ」

「あの、浪川琴莉です。よろしく、お願いします」

慌ててペコリと頭を下げる。すると、三人の中で一番軟派な雰囲気を出す男が一人、こちらを観察するような視線を向けて近づいてきた。明るい茶髪には緩くパーマがかかっている、赤フレームのポップなメガネをかけている。服装もパーカーにチノパンというラフな格好で、およそオフィスには似つかわしくない男だ。

「妻候補ねえ？ そんな風に紹介してきた子ははじめてだなー。あ、オレは朝霧司だよ、ヨロシクねー」

気さくに挨拶し、まるで猫のような三白眼を細める。口の端をにんまりと上げて、意地悪そうな

表情をした。

そんな彼の隣に並んだのは、また違うタイプの男。

「柳涼太です。よろしくお願ひしますね」

柔らかなような短髪が、窓から差し込む光に当たってライトブラウンに輝く。スーツ姿が妙に似合わないのは童顔だからだろうか。穏やかな笑みがとても似合う、目鼻立ちの整った人。成海も美形だけど、柳さんはアイドル系の美男子といったところだろうか。

面食いを自覚している私はつい彼の顔を凝視してしまう。成海と違ってすごく性格がよさそう。

正直、柳さんの年収も二十万を超えているならいっそ乗り換えたい、と思ってしまうほどだ。

私が勝手に柳さんの年収を予想していると、視界に新たな影が現れた。

それはまるで妖怪のぬりかべのよう。四人の中でも一番背が高く、やたらと体格がいい。黒髪を後ろに撫でつけたオールバックの髪型に、飾り気のないダークスーツ。これでサングラスをかけたら、SPのようである。

「真田紳です」

「よ、よろしく、お願ひします」

慌てて挨拶を返す。真田さんはロボットみたいに表情の変わらない人だ。

「ユキちゃん、自己紹介しないのー？」

朝霧さんがヒョイと後ろを振り返り、神部さんのほうを見る。神部さんは表情を変えることなく、

「私は済ませましたから」とすげなく返した。

赤フレームのメガネにふわふわした茶髪男が朝霧さん。穏やかそうな美男子が柳さんで、真面目そうなノッポ男が真田さん。唯一の女性社員である神部さん。

名前を覚えようと頭の中で繰り返していると、成海がぼんぼんと私の肩を叩いた。

「よし、自己紹介は終わったな。さて琴利、最後にもう一度確認するが、テストを受けるんだな？」

「もちろんです！」

「わかった。ではさっそくテストの具体的な内容を教えよう。まず、君にはしばらくここで生活し、仕事をしてもらう。もちろん期間内は仕事内容に見合った給料を支払おう。見ての通り、リビングの書棚がかなり散らかっているだろう？ 君の仕事はここを整理整頓し、掃除することだ。それから俺がこのマンションに来た時に限り、俺の世話と相手をしてもらう。手料理の提供、洗濯、セックスといったものだな。それから」

「まっ、待って、待ってー！ 今、何かすごいことサラッと言いませんでしたか!？」

慌てて体ごと彼のほうを向いて話を中断させる。成海は「何だ？」と言わんばかりに首を傾げた。

「質問か？」

「質問っていうか……。質問っていうより、その、今、せつくす、とか、言いませんでしたか？」  
恥ずかしくてつい、セックスの部分が小声になってしまう。彼は呆れたような表情をした。

「言ったが？ 俺の妻にふさわしいかどうかを見定めるテストなんだぞ。体の相性を確かめるのは

「当然だろうが。いちいち過剰に反応するな。まさか未経験でもあるまいし」

「えっ、いや過剰、じゃなくて……。わ、私……。あの」

そのまさかの、未経験なのだが。

しかし私が言葉を発する前に、成海は話を進めてしまう。

「神部、しばらく君に彼女を預ける。猫の手程度にしかならないだろうが、適当に使ってくれ」

「わかりました」

「ちよっ、待つて！ 使うってどういうこと!? ちゃんと説明してください!」

成海は説明がなさすぎる。思わず詰め寄ると、彼は非常に面倒くさそうな顔をして「頭の回転が悪い女だな」と悪態をついた。やはりこの男、口が悪い。

「いいか琴莉、俺は君をテストすると言ったな。妻にふさわしいかどうかを見極めるテストだと」

「は、はい」

「そもそもだ。君は俺の妻になるのがどういうことなのかわかってるのか?」

「え……。セレブ入りして、お金使いたい放題になるんですよね? つ、あいた!」

ビシッとデコピンを食らう。びっくりして額を押さえながら見上げると、成海は怒っているわけではなく、むしろニヤニヤと嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「やはり君は欲望に忠実で頭が悪く、利己的な女だな。いいか、この際はつきり言っておく。俺の妻になるということは、リスクを負える女になるということだ」

「リスクを、負う?」

きょとんと首を傾げる私に、成海はうなづく。

「俺の仕事は、体力と発想を資本にしている。つまり、俺が倒れたら会社も傾くということだ。さて、俺がもし大病を患って倒れたとしよう。その時、君はどうすればいいと思う?」

「……ええと、精一杯、看病する? いたっ!」

次は頭頂部にビシッとチョップを食らった。涙目になりながら頭をさすっていると、成海は尊大な仕草で腕を組む。

「大病だぞ? 素人の看病でどうにかなるものではないだろうが。そんなことになったら俺は病院に行くし、必要であれば入院だつてする。だがその間、会社はどうする? つまりは、俺の代わりを務められる女。それが俺の妻になる絶対条件だ」

「なっ……!?!」

「それに加えて家事全般を完璧にこなし、俺の仕事の疲れを癒すことができ、適切に俺の稼ぎを運用することができる女だな」

「何それ! そんなウルトラ無敵な主婦、そのへんにいるわけじゃないでしょうが!」

「だからテストをしてみると言っているんだ。無論、満点を望んでいるわけではない。限りなく満点に近づく努力はしてもらうがな」

「……っ、あんた、ただの便利な秘書兼家政婦が欲しいだけじゃない!」





慧一つという名前のATMと結婚するのよ！」

「はっ……、よく言った。それでこそ、君を選んだ甲斐があるというものだ。俺も手加減なしで君を採点することができる。言っておくが俺は甘くないぞ。言いたいこともすべて言わせてもらう」「初対面からズケズケと言ってたくせに何を今さら？ 反論するなという条件はないみたいだし、私だって遠慮なく言わせてもらうわよ」

その時、パチパチと拍手の音が聞こえてきて、慌ててその方向に目を向けた。チャライメガネの朝霧さんが楽しそうな表情で手を叩いている。

「何だかよくわからないけど、交渉成立？ ほんとに面白い子連れてきたんだねー。妻候補って言ってくけど、別に恋人同士ではないみたいだし」

「確かに彼女への扱いは今までの女性への扱いと全然違いますよね。雑、と言いますか、紳士的でないと言いますか」

アイドル系イケメン柳さんが、朝霧さんの後に続いた。成海は私から視線を外すと、彼らに向かってうなづく。

「当たり前だ。琴莉は恋人でもないし想い人でもない。万が一の確率で奇跡的に俺の妻になった時には、人並みに愛情を注いでやってもいいが、今はそれ以前の段階だな」

隣でズケズケと言葉を発する成海に対して、殺意にも似た感情が湧き上がる。万が一って、この男はやっぱ私が合格できるとは思っていないのか。それならどうして私をテストの相手に選んだ

のだろう。単なる気まぐれ？ それとも、彼にとつてこのテストは暇つぶしのようなものなのか。

ムカムカした表情をしている私をよそに、好き勝手な会話が飛び交う。

「琴莉さんがかわいそうに見えるのですけどね。もう少し優しく接してもよいのでは？」

柳さんの発言に、朝霧さんが続く。

「でもコトリちゃんもそれなりに打算があつてここに来てるんだよねえ？ これがもし、コトリちゃんがナルミンに片思いしてるって話ならヒサンだけどさあ」

「確かにお互いへの恋愛感情はなさそうですが。でも成海さん、どうして琴莉さんをテストの相手に選んだのですか？ あなたなら他にも寄ってくる女性はいたでしょうに」

柳さんに問いかけられ、成海が口を開いた。

「もちろん選択肢はたくさんあったよ。そのために場末の婚活イベントに参加したのだからな。俺があの中から琴莉を選んだ理由はただひとつ。一番駄犬に見えた、それだけだよ」

「だっ……!?! ちょっと待て、このっ、言うに事欠いて『駄犬』ってどういうつもりよ！ 世の中には言っていることと悪いことがあるのよ!？」

駄犬。これ以上ひどい悪口もないだろう。ブスとか下品とか言われるのももちろん嫌だけど、駄犬って。何がひどいって、人間扱いすらされていないのだ。

しかし、噛みつく私を見下すように成海は冷たい視線をよこし、ハッと鼻で笑ってきた。

「では聞か、君はどうして自分が選ばれたと思ってるんだ？ 君からすれば成功者に見える俺

が、なぜあの会場で数ある女性の中から君をテストの相手に選んだと思う？」

「つ……、そ、それはその、み、見た目、とか？」

それくらいしか思いつかない。しかし、私の言葉はどうやら思いきり間違っていたらしく、成海は声を上げて笑いはじめた。百パーセント私を馬鹿にする笑い方である。

「やはり俺が見込んだ通りだ。頭の回転が悪い上にそのおめでたい性格。身のほどをわかっていない自意識の過剰さ。そうだ、それでこそだよ」

「なっ……!!」

「俺があの場合で探していたのはまさに君みたいな女性だった。あからさまに男受けを意識した安っぽい化粧に髪型。男の稼ぎの上であぐらをかこうとする浅ましい性格。特技ひとつないくせに一人前に餌をねだる駄犬と何が違う？ 君は、本来なら俺が絶対に選ばないタイプの女性だ。だが、俺はそういう女性を探していたんだ」

ズケズケを通り越してグサグサと言ってくる。この男の言葉は刃物みたいだ。

今まで何人かの男性とつきあってきたけど、ここまで言われたことはなかった。別れ際にほんの少しチクリと棘を刺されたことはあったものの、真つ向からめつた斬りにされたことはない。

そんな中、満身創痍な私に朝霧さんが追い討ちをかけてくる。

「つまり、探してたのはゲテモノってこと？」

「そういうことだ。朝霧も真田も柳も、俺を含めた四人全員の好みじゃない女だろう？ そういう

のを選んでみたんだ。逆に面白そうだったからな」

ゲテモノ……

朝霧さんの発言を否定しないどころか、むしろ肯定する成海。

私、ここまで言われるほどのことをした？

何も悪いことなんかしてない。それなのに、どうしてここまで言われなければならないのだろう。欲深いのがそんなにいけないことなの？ 自分の幸せを掴もうとして何が悪いのよ。

思わず涙がにじんでしまう。だけどここで泣くのはひどくみつともないと思い、俯きながら気合いで耐えた。そこに、控えめな神部さんの声が聞こえてくる。

「朝霧さんも成海さんも言いすぎです。朝霧さんの発言は初対面の女性に向かって言う言葉ではありませんし、成海さんもいくらこれがテストとはいえ、いたずらに浪川さんを傷つけていいわけがありません。彼女の人格を否定するようなことは、これ以後発言しないでください。同じ女性として腹が立ちます」

「ああ、すまないね、神部。ここまで言うつもりはなかったのだが、今ここでしっかりと彼女の立ち位置をわからせておきたかったんだ」

「それならもう少し言い方を考えてください。あと、謝罪は私ではなく浪川さんにすべきです」

「……確かにそうだな。琴莉、ずいぶんと気分を害しているようだが、今後は意味もなく君を罵る発言はしないと約束しよう。今回だけだ。悪かったな」

頭を撫でられる。私は反射的にその手を腕で振り払った。パシッと小気味よい音が聞こえて、成海はおかしそうに、振り払われた自分の手を眺める。

……悔しかった。神部さんにかばわれたのも惨めだし、彼女に言われたから仕方なく謝罪の言葉を口にする成海にも腹が立った。上辺だけの言葉で私への暴言をうやむやにしようという姿勢が許せない。

そうだ、ここに味方はいないのだ。

成海こそが最大の敵。だけど、ここから逃げたくない。

年収二千万のATMと結婚するための試練は、すでにはじまっているのだ。

今日、成海が神部さんと男性陣をここに集めたのは、彼らに私を紹介するのが目的だったらしい。私がしばらくここに住み込むため、私という存在を知らせておきたかったのだろう。この部屋はミーティングなどにも使われているから、いつ鉢合わせするかわからない。

私への罵倒だか紹介だか的一幕を終えると、ほどなく皆マンションから出ていった。

帰る際、一番おしゃべりそうな朝霧さんは軽く私の肩を叩き、「まあ頑張りなよ」と心にもなさそうな調子で励ましてきた。

私でもわかる。朝霧さんは、私に何ひとつ好意を持っていない。成海と同じで、取るに足らないところを見下した瞳をしていた。

私の中で、彼は二番目に嫌いな人物として急浮上する。もちろん、一番は成海だ。

その成海は、部下たちがマンションを出た途端、開口一番に私へ命令を言い渡した。

「では琴莉、時間がないからさっそく今からテスト、というより働いてもらうぞ。まずは料理だ。

そこに冷蔵庫があるだろう？ 中に適当な材料が入っているから昼食を作ってくれ。俺と君の二人分だ」

そして彼は「シャワーを浴びてくる」と足早にリビングを去ってしまふ。

テストははじまった。内心面白くない気持ちはあるけど、しぶしぶキッチンまで移動し、冷蔵庫を開ける。しかし中に入っていたものを見て、思わず声を上げてしまった。

「な、何よこれ。バターとジュースしか入っていないじゃない」

野菜庫には、なぜかジャガイモがひとつとニンニク一かけ。冷凍庫にはロックアイスしかない。ものの見事にスッカラカンな冷蔵庫だ。これで昼食を作れってどういうことだろう。ごそごとキッチンの戸棚を開けて中身を確かめてみると、乾燥パスタと米、塩こしょう、コンソメがあった。しかし、この材料で料理を作れと言われても、選択肢はかなり少ない。

これは新手の嫌がらせなのだろうか？ しかし、向こうがそのつもりなら私も真つ向から勝負するつもりである。絶対にこのしょぼい食材から料理を作ってやる。

しばらく躍起になって料理をしていると、シャワーを終えた成海がガチャリとリビングのドアを開けた。着替えてラフな私服姿になっている。ポートネックの黒いシャツに綿生地のスボン。髪は

まだ整えられていない。先ほどまでとは違う姿にしばし目を奪われる。

私の視線に気づいた成海が、首にかけたタオルで頭を拭きながら「何だ？」と面倒そうにこちらを見る。私は慌てて下を向き、料理に集中した。

「まだできないのか？ 段取りが悪いな。料理が得意じゃなかったのか？」

……さっそくこれだ。

この男と楽しく世間話をする日なんて絶対来ないだろうと確信しつつ、「もうできます」とぶっきらぼうに答える。

食器棚にはやたら高そうな皿しかなかったが、とりあえず一番シンプルな白い深皿に盛りつけ、カップにコンソメスープを注いだ。成海はすでに白いソファに座っている。私はローテーブルに二人分の昼食を並べた。

「ふうん、ペペロンチーノとスープか」

「あの冷蔵庫の中身でできるものって言ったら、これとガーリックライスくらいしか思いつかなかったの。ご飯を炊く時間を考えたら、パスタのほうが早くていいでしょう？」

「確かに。ではいただきます」

「……いただきます」

ソファはひとつ。成海の隣に座り、スパゲティを食べはじめる。

味は、悪くない。成海はどう感じただろう？

「普通だな」

食事を進めながらぼつりと漏らす。

「それは褒めてるんですか？ けなしてるんですか？」

「どちらでもない。ただの感想だ。まあこんなものか、という感じだな」

「……」

けなしているだろう、これは。

普通ってどういう意味なんだ。これでいいのか、それともっとおいしく作れって言いたいのか。だけどそれを聞いたらまた嫌味を言っつきそうだったので、黙ってスープを飲む。

「スープはまあまあだな」

「まあまあと普通の違いってなんですか？」

「普通よりわずかにいい。だが、バター味のペペロンチーノは面白かった。これはこれで悪くないな」

素直においしいって言えばいいのに！

年収二千万の男の妻になるには、こんなにも我慢を強いられるものなのか。内心トホホな気分ですパゲティを食べていると、先に食事を終えた成海がキッチンに行つて水を汲み、その場でこくりと飲んだ。そしてスープをのんびり飲んでる私を睨みつけ、鋭い声で指図してきた。

「早く食え。時間がないと言っただろう」

「時間って……。そういえばさつきも言ってましたけど、何を急いでるんですか？」

水を飲みきった成海はシンクにコップを置き、ハアとため息をつく。

「俺は忙しいんだ。今日は出張がある。夕方のフライトで発つ予定で、あと二時間しかない。だからさつきとやるぞ」

「さつきと、って、何を？」

キョトンとする私に、成海は呆れたような顔をした。

「セックスに決まっているだろう。俺が次に日本に帰ってくるのは二週間後だからな。先にやることはやっておく。さつきと片つけて寝室に行くぞ」

「へ、寝室。せつ……。くす？ せつくすって、セックスううう!!？」

私の心からの叫び声にも、成海はわずらわしそうにこちらを睨みつけ、「早くしろ」と言うだけだった。

結婚をすれば必ずあるはずの夫婦の営み……

しかし、私はそれをしたことがないのだ。

別に潔癖症ってわけじゃない。結婚するまで処女でいたいなんて古風な考えも持っていない。ただ機会がなかった、それだけである。

ドッドと心臓が嫌な音を立てる中、こわごわと寝室の端に立つ私とは対照的に、成海は早々と

シャツを脱いで床にバサッと投げる。そしてどかりとベッドに座り、横目で私を睨んだ。カーテンの隙間から一筋の光が差し込み、彼のメガネがきらりと光る。

「何をしている。さつきとしろと言っただろうが」

「あ、あ、あの、その……」

さつきまでの喧嘩腰はどこへやら。今の私は完全にへっぴり腰である。

だって、セックスって。本当にするの？ こんな、初対面に近い男と。しかも将来を約束したわけでもない、愛し合ってもない男と。

マジで？ テストのために？

完全に怖気づいた状態の私に、成海が呆れたような目をして、つまらなさそうに口を開く。

「そんなに嫌なら、さつきと荷物をまとめて逃げたらどうだ。そんなところで突っ立っていられるのが一番鬱陶しい」

「う、鬱陶しいって……。ひどい」

本当に成海は容赦ない。でもセックスなんて、二つ返事で了承できるものじゃないし、何より私をはじめで、どうすればいいのかさっぱりわからない。

俯いて黙り込む私に、成海はため息をついて言う。

「俺は無理矢理するのは趣味ではないから、合意の上でしかしない。君がこの行為に了承できないのであれば今すぐにテストは終了する。つまり、出ていけということだ」

「……っ」

そんなにセックスする必要ですか？ テスト初日にしなきゃならないほどの行為なんですかね？ 心の中ではいくらでも悪態あくたいをつけるが、口には出せない。私が一言でも拒むような言葉を口にすれば、すぐにでも彼は「テスト終了」と言っいて私を叩き出すだろう。

それは困る。何のために私はここに来たのだ。彼に馬鹿にされてコケにされるため？ 違う。目をつぶって考える。そうだ、私は勝ち組の男と結婚し、セレブな生活をするためにここへ来たんだ。

——そのためなら、はじめての体験くらい、彼にくれてやる。

半ばなかやけくそ気味に足を一步踏み出し、どす、どす、と足音が聞こえるほどの勢いで成海に近づく。やがて彼の前で仁王立ちにおうだちになると、親の敵かたきのように彼を睨にらんで見下ろした。

「さっ、先に言っておきますが！」

「何だ」

「わわわ、わたし、はじめて、ですからね！」

いいか、私に何の期待もするな。テクニクなどひとつも持っていないし、成海の言う「相性」が何なのかもさっぱりわからない。だけどアンタが何かを確認したいなら好きにしろという意味を込めて凄めすごば、成海は意外そうに目を丸くし、「ふうん」と気のない返事をよこす。

「それなりに遊んでいそうな見た目ののに、男とつきあったことがないのか？」

「別に遊んでいませんし大きなお世話です。つきあった人は何人かいましたけど、こ、こういうことにはこぎつけなかったといえますか、その前に振られたといえますか……」

悔しさにギリギリしていると、成海はゆっくりと私を見上げる。メガネ越しの黒い瞳には何の感情も宿もっていないくて、乾ききっていた。

「君が未経験だったとしても俺の方針に変更はない。セックスは夫婦生活において非常に大きなフアクターだからだ。俺は、俺の嫌いなセックスをする女と一生を共にする気はない。苦痛でしかないからな」

成海の嫌いなセックス。

それがどんなものなのかは全然わからないけれど、私はもう好きにしたらいいでしょという気持ちでベッドにストンと座った。すると成海は私の腕を乱暴に引き、ベッドに押し倒す。

一際大きく音を立てる心臓。私の上のしかかった成海は、変わらず感情のない瞳で私を見下ろした。

「俺は琴莉が処女だろうが何だろうが気にしない。逆に言えば君がはじめてでも責任を感じないし、これはテストなのだ」と割り切っきて君を抱く。だから妙な期待をするな。下手な小細工も意味をなさない」

「えっ、期待って何に……？ あと、小細工って何ですか？」

目の前に映るのが成海だけになってしまっまって、頭が混乱する。とりあえず気になる単語を聞き返

すと、成海は「わからないのか？」と首を傾げた。

何を言っているんだろう。彼が私に期待してないことは最初からわかっているし、私も成海に期待してない。

わざわざ言われなくても、このセックスは愛情ひとつない、ただのテストだと理解しているのに。しかし成海は「ふむ」と、少しだけ表情を変える。わずかに驚いている、そんな様子だ。

「なるほど。金にがめつく浅ましい性格をしているが、下品ではないらしい。以前、君に品がないと言ったが、取り消そう」

「……成海さん、自分が言った罵詈雑言、一応覚えておいてね」

「当たり前だ。ふん、貞操観念があり、身持ちが固いところは割と好印象だな。……君は、簡単に体を許す女ではなかった。では今こうしているのは、すべてテストのためか？」

成海は私の返事を持たず、唇を重ねてきた。

突然の口づけに驚き、目を見開く。実はファーストキスなんです、なんてことは……言える雰囲気ではない。

「そう、ですよ。だつてしなきゃ、いけないんでしょう？」

「そうだな」

短く相槌を打ち、成海が再び口づけてくる。軽く唇が重なる音がして、キスって本当にこんな音がするんだなあと他人事のように思った。

……だけど、セックスとキスってセットだったのか。キスくらいは好きな人としておきたかった気もする。すべては男をえり好みして打算の上でつきあってきたツケなのか。そういえば私、まともな恋愛すらしていないような。

初恋は高校の頃だったと記憶している。けどすぐに玉砕し、実ることはなかった。それから好きな人もできないまま年月が過ぎ——大学を卒業する頃になって、働きたくないという一心から合コンなどに参加して何人かとききあってみたが、どれもうまくいかず……。そのあたりにはもう純粋な恋愛からすつかり遠ざかっていたのかもしれない。いつの間にか、合コンに来る男を、そして婚活パーティーで回転寿司のように流れてくる男を、冷めた目で見定めていた。男を金と顔しか判断しなくなった。どうせ男だつて顔や従順さで女を比べて選んでるんだから、お互い様だろうと思っていたのだ。

さもない青春だ。まともな恋愛もしたことがないなんて。

そして今、年収二千万の男に愛のないキスをされ、セックスまでしようという始末。

……寂しい。しょっぱい。私の人生は、いかの塩辛味なんだ、きつと。

「——おい」

低く唸るような声。はっとして意識を戻すと、私の上のしかかっていた成海がひどく機嫌を損ねた様子で尋ねてきた。

「なぜ泣くん」

「え？」

驚いて頬を触ってみる。するといつの間にか零れていたのか、涙が一筋伝っていた。私が啞然としていると、成海はさらに苛ついたような声を上げる。

「俺は言ったな？ 合意の上でしかないよ。泣くほど嫌なら——」

「ちがっ、違います！ これはそういう涙じゃないんですっ！」

荷物をまとめて出ていけと言われないよう、慌てて言葉を重ねる。

危ない、すっかり自分の世界に入り込んでいたけど、今はセックスの真つ最中なのだ。そして私は現在テストされている身。こんなことで成海の気分を害しておしまいというわけにはいかない。体を起こそうとした成海の手首を掴み、必死になって言葉を続ける。

「あの、何かついアンニュイな気分になったと言いますか、浸っちゃったと言いますか！ キスくらいはじめては好きな人としたかったなとか、まったく考えてませんから、どうか続きを！」

「なるほど、君はキスすらはじめてだったというわけか。悪かったな、最初の男が性悪で責任感もなくテストのために唇を奪うような男で」

「うっ!? そ、そこまで考えてませんけど。ああ、しちゃったものはもうしょうがないというか、別に傷ついたり嫌悪したりしてるわけじゃないので、あの……」

まごまごしながら、私は俯く。

「……テ、テストを終了、しないでください。頑張るから……」

すると私の気持ちを通じたのか、成海はため息こそついたものの、サツと髪をかき上げ、私に再び覆いかぶさってきた。

「わかった。続きをしてやろう」

私が望んでいた答えを得られて、心からホッとした。

セックスはジェットコースターに似ている——そう言っていたのは誰だったか。

カンカンという音を聞きながら、レールの一番高いところへ向かっていくドキドキ感。すごい速度で落下する恐怖感。すべてが終わった後の、どこかホッとした安堵感。

あれは本当だったんだなあとぼんやりした頭で思う。初体験の感想はジェットコースター。つまり何が何だかわからない。わからないうちに、いつの間にか終了していた。途中、気持ちいいとか目が飛び出るほど痛いと色々感じたけど、すべてが終われば「やってしまった」という妙な罪悪感と、不思議な高揚感が心に残る。

しかし、セックスを終えた成海の第一声は、デリカシーすらどこかに投げた一言だった。

「四十点だな」

歴史上、セックスで点数をつけられた女などいるのだろうか。

人の処女を奪って四十四点はないだろう。もう少し甘めに点数をつけても罪はないはずだ。

「その点数は成海さんにとっていい点数ですか、悪い点数なんですか」



成海が見ているところで着替えをする気にならず、シーツを被<sup>かぶ</sup>つたま睨<sup>にら</sup>みつける。彼はクロ―ゼットからワイシャツを取り出して袖を通し、「点数通りの感想だ」と口にした。

「色気はないし、体形も大したことはない。ぎゃあぎゃあといちいちうるさい」

「だっ、だっであれは！ い、痛かったんだもん！」

「だからはじめてだということも考慮して四十点なんだ。次はもう少し静かにしている。別に妙なことを覚える必要はないが、雰囲気壊すような色気のない叫び声を上げるな」

成海には優しさという成分が圧倒的に足りていない。ブツブツと文句を言いながらシーツの中で丸くなっていると、ふいに「琴莉」と名前を呼ばれた。顔を上げると、性悪男<sup>しょうあくおとこ</sup>は、着替えをしなからメガネの奥の瞳を意地悪く細める。

「お手」

まるで犬への命令だ。

非常に屈辱的だったが、色々と投げやりな気分になっていた私はポイと手を差し出す。すると、スーツの上着を着てネクタイを締め終わった彼が、内ポケットから革財布を取り出し、ぴらりと一枚の紙幣を渡してきた。

……福沢論吉<sup>ふくざわゆきち</sup>が一枚。

「一ヶ月分の生活費だ。君一人ならこれで十分だろう。経過を見て必要と判断すれば、都度増やす。帳簿をつけるのを忘れるなよ。その他、君への指示はメールやネット電話を通じて出す。呼びかけ

には応じるように。では、行ってくる」

「い、行ってらっしゃい……」

目の前の男はつい先ほどの情事などなかったかのように、淡々とした表情だ。最中はどこか艶めいた色があった気がするのに、今やそんなものは皆無<sup>かいむ</sup>。完全にビジネスマンの顔に切り替わった男は、私に一万円と連絡用のタブレットを渡して部屋を出て行った。

「一万円なんて……、私の一ヶ月分の食費と同額じゃない」

週一で外食ができるかも怪しい。水道代や電気代といった光熱費は払わなくてもいいらしいが、食費はもちろん、トイレトペーパーや洗剤といった日用品を買うのも、これでやりくりしなければいけない。

唐突に昔テレビでやっていた、ある企画番組を思い出す。芸能人が一ヶ月を一万円で生活しなければいけない、というもの。あれをやらされている気分になり、一人で落ち込んでしまう。

——確信した。あの男はケチだ。守銭奴<sup>しゆせんぬ</sup>で金の亡者<sup>もうじや</sup>なのだ。

みるみるとやる気が失われていく。私は年収二千万の男を手に入れたところで、本当にセレブな生活ができるのだろうか。

オシャレな高級ブランド服で身を固め、ブランドのロゴが強調されたバッグをいくつも手にしたり、平日の昼下がりにホテルランチを楽しんでみたり。セレブな奥様に大人気のエステサロンに通

い、爪にもネイルアートを施して――

それが私の目指す、セレブな勝ち組女の姿なのに。

あの男が夫では、それができるとは思えない。むしろ「無駄」の一言で一蹴されてしまうような気が……

思わずマイナス思考の渦に呑み込まれそうになって、慌ててふるふる首を振る。

ケチだろうが守銭奴だろうが関係ない。結婚さえすればこちらのもの。幸い、奴は海外出張も多い多忙な男。ああいった男は結婚したところで家庭を顧みないと相場が決まっている。彼の出張中には、好き勝手に話したらい話だ。一万円で何とかしろというのはきつと、これがテストだからだろう。あえて少なめに渡しているのだ。

……俄然やる気がよみがえってきた。

「いいわよ、やってやるうじやない！ 人を馬鹿にして……見てなさいよ。悪口全部撤回させてやるんだからっ！」

私はできる子なのだ。家計のやりくりくらい朝飯前だつてところを見せてやる。

それから一週間、私はこのテスト生活にどうにか順応すべく奮闘していた。

朝はとにかく早起きして朝ご飯を食べ、身支度を整える。なぜなら、神部さんが必ず朝七時半にこのオフィスにやってきて、黙々と仕事を始めるからだ。まったく、朝から油断ならない。

「浪川さん、何か困ったことはありませんか？」

「あ、いえ、ない……です」

あまり嬉しくないが、午前中は彼女の顔を見るのが日課になっている。神部さんはいつも私に「困ったことはないか」と尋ねてくる。一体どういう意図があるのだろうか。もしかして、私から何かを聞き出して、成海に告げ口するのが目的なのだろうか。

どこか奇妙さも感じる。

さらに三日が過ぎ、私がこの生活にも少し慣れたと思いはじめた日のこと。朝七時半に現れたのは神部さんではなく、久しぶりに見える人たちだった。

相変わらずの赤いポップなメガネで、ふわりとしたパーマをかけたラフな服装の男。

「やつほー、久しぶり。元気してたー？ コトリちゃん」

朝霧さんだ。明るい声でぶんぶんと手を振る姿は大学生に見えてしまう。

「おはようございます。あなたがここにいらしてからずいぶんと部屋がきれいになりましたね」

柳さんははじめて出会った時と同じ、丁寧な言動に穏やかで優しい瞳。朝から眼福ものの美男子さんである。

この二人は初日に顔合わせして以来、一度も見ていなかった。一方、背の高い無表情なスーツの男、真田さんは時々神部さんと来ていたけど、何しろ彼はまったくしゃべらない人なので、存在感があまりない。

私が少し驚きながら「おはようございます」と頭を下げた直後、おなじみの神部さんも少し遅れてリビングに入り、挨拶した。

「あの……真田さんは神部さんと時々いらしてましたけど、朝霧さんと柳さんは初日にお会いして以来ですよね」

私の質問に、朝霧さんが笑顔で答えた。

「ああ、オレは基本在宅ワーカーだし、ヤナギンとサナツチは営業だから外にいることのほうが多いんだよねー。今日はミーティングが近づいてきたからこっち寄ってみたんだよ。色々置きっぱなしの資料とかあるからさー」

「もうすぐ成海さんが帰国しますからね。近いうちに招集がかかるでしょうし、僕も頼まれていた書類を作成しにきました。あ、本棚を整理してくださいませんか？ありがとうございます」

「つつりと柳さんにほほ笑まれ、思わず笑い返してしまう。」

彼は敬語で物腰も柔らかく、成人男性にしてはかわいらしい見た目をしているから、人受けがともよさそうに見える。営業をしているという話だけど、彼が相手ならきつとうまくいく商談も多いのだろう。

「これ、窓側の本棚を書類に、向かい側を書籍に分けてくれたのですね」

「あ、はい。えっと……本の種別がわからなくて、まだごちゃごちゃしてると思いますが。書類もとりあえずまとめただけですから」

本棚に置かれていた本や書類は、私にとって意味不明なものばかりだった。半分以上が英語で書かれていたし、中にはプログラム言語のような理解できない内容も数多くある。さらには書類も雑然としていて、計算書のようなものや殴り書きしただけのレポート用紙、果ては何かの資料らしいグラフやデータの束など、専門的なものばかりだった。

途方に暮れた私ほとにかく本と書類に分け、別の書棚にまとめることにした。これだけでも十分資料スペースはきれいになり、割と満足している。

この部屋を掃除するのが仕事なのだから、床さえきれいになればいいのだ。

「これだけでも全然違いますよ。前よりもずっと目的のものを探しやすくなりました」

ニコニコと褒めてくれる柳さんは、優しい人だ。私はすっかり心を許し、こんなにもいい人なら初日からもつと話しておけばよかったと、和やかに笑い返す。するとキッチンで神部さんからコーヒーを受け取っていた朝霧さんがニヤニヤとした笑みを浮かべながら、こちら側に歩いてきた。

「なににない？ ヤナギン、コトリちゃんに優しいね。ナルミンに怒られちゃうよ？ 一応彼女、ナルミンの『妻候補』なんだからさ」

「普通に会話しているだけです。それにあなただって資料集めは口実で、本当は琴莉さんに会うためにわざわざ来たのでしょうか？」

「アタリ。いやあ、だつて気になるじゃん？ ナルミンの妻候補だなんて、そんな風に紹介されたのはじめてだったからねえ。オレたちに対する牽制なのかなって思っちゃうくらいだし」

「何ですか、牽制<sup>けんせい</sup>つて。今までだつて何かした覚えはないんですけどね」

目の前で交わされる謎の会話。戸惑つて二人を眺<sup>なが</sup>めていると、視線に気づいた朝霧さんがこちらを見て、にこりと笑う。

「ねー、どうしてナルミンのテストを受けようと思ったの？」

「え？ それは……、その」

「今さら遠慮はなしにしようよ。やっぱり稼いでるから？」

「え、ええ。そうですね。その通りです」

私がうなずくと朝霧さんは「あははっ」と声を上げて笑い、ズボンのポケットに手を突っ込んで私の顔をのぞき込む。意地悪そうだけど人懐っこい。つい、敬語が崩れてしまいそうな親しみやすさがある。

「それだけなの？ 年収だけが理由でこんなところに押し込められてナルミンの言うこと聞いて、テストなんかにつきあつてるわけ？ 期限とかないの？」

「期限はまだ聞いてないですけど、本当に年収が理由です。あと、顔がいいのもあります」

「ああ、顔ね。確かにナルミンはカッコイイよね。でも優しいとか、そういうのは理由にないの？」

「……優しい？」

思いきり顔が歪<sup>ゆが</sup>む。

あれのどかが優しいというのか。その言葉は柳さんみたいな人に似合うのであつて、成海の場合、

むしろ真逆だ。厳しくて意地悪で陰険<sup>いんけん</sup>でケチで守銭奴<sup>しゆせんぬ</sup>という、金を稼いでいなければ何の魅力もないような男。優しい一面があつたら、私はもう少し彼に対して好印象を持つてははずだ。

「想像もできません。あの人が、優しいところなんてあるんですか？」

聞き返すと、柳さんと朝霧さんは顔を見合わせ、揃つてクスクスと笑い出す。そして柳さんが笑いまじりに「そうですね」とうなずいた。

「成海さんは、確かに僕にも厳しいですよ。妥協しないというか、仕事に関してスパルタですよね」

「でもさあ、今まで連れてきた恋人には、人並みに優しくかつたんだよー。どうやらナルミンは、君に対して遠慮をしないつもりなんだね。まあ、彼の好みからかけ離れているようだから容赦<sup>ようじや</sup>なく言えるのかもしれないけど」

大変だねえと笑われ、朝霧さんに頭を撫<sup>な</sup>でられた。

かつての恋人には優しくかつたという成海。私の場合、彼の恋人ではないから厳しい態度なのか。

その事実は、少しだけ悲しい。

彼は本当に私を妻にするつもりでテストをしているのだろうか。それともやっぱり、便利な家政婦代わりが欲しいだけなのか。成海慧一という人物の真意がさっぱりわからない。

ようやく初日から二週間経ち、彼が帰国する日がやってきた——のだが。